

市民参画で快適なまちづくりを進め、外資や規制を活用し発展する都市を目指して欲しい。

—— 外務省顧問 宮本雄二氏



宮本 雄二(みやもと ゆうじ)

1946年福岡県生まれ。修猷館高校、京都大学法学部卒業後、1969年に外務省入省。国連、中国、米国(アトランタ)での駐在勤務や本省各局での勤務を経、2002年には駐ミャンマー、2006年には駐中国の特命全権大使となる。

2010年より外務省顧問。日本日中関係学会会長ほか要職多数。著作に『これから、中国とどう付き合うか』がある。

潜在力を引き出し、強みを発揮する25年へ

この25年、初めの約10年は日本の元気の良さがありましたが、その後は低迷して出口を見出せないままですね。この間、福岡市は様々な努力をし、世界の住みよい都市にもランクインする活気ある都市になったのですから、低迷期によくやったと思います。即ち、25年前のビジョンは時代の流れを正確に捉えていたということでしょう。

今後の25年は、想像を絶する時代になるでしょう。我々常人の想像を遥かに超える技術革新⇒経済変化⇒社会変化が、猛スピードで進むでしょうから、今後25年後に向けての計画は《大きな方向性》でよく、あとは5か年くらいの計画で対応していけば良いと思います。それほど変化が激しくなることへの覚悟を持った上で、歩みを進めなければならない、ということです。今後は日本も福岡も、自らの潜在力を最大限に引き出し、強みを発揮する社会にならないと、他に遅れを取ります。良い点は残しつつ、変革しなければなりません。

「開かれたまち」が福岡の最大の強み

今後は激しく相互交流する世界になります。国と国の垣根は一層低くなり、人の移動はますます自由になります。

中でも、高度人材ほど国籍は関係ありません。ハーバード大学を優秀な成績で卒業したセルビア人をドイツ企業は喜んで雇いますが、そういう世界にいかに関与できるか。日本人はすぐに外国人労働者=犯罪と結びつけますが、最も国際的に流動する外国人は高度人材で、この人々を日本や福岡がどう惹きつけるかが、国力や地域力に大きく関係するでしょう。ですから、そうした刺激を外から受ける心構えは不可欠です。経済を発展させていき、同時に知的な刺激を受けていくためには、やはり開かれたまちづくりが必要でしょう。

福岡に住む人がどれほど気付いているかわかりませんが、福岡ほど外に開かれている都市は国内にありません。横浜や神戸は百年強の歴史。それに対して福岡・博多は江戸時代以前から開かれており、それ故、他所から福岡に来るとその開放感や開放社会に感動し、住みやすい町と言われるわけです。私はそれが福岡の最大の強みであり、それを福岡市の様々な構想の出発点にするべきだと思っています。

昔の開放時代を軸に、社会融和の進むまちへ

私は、「違いをいかに打ち出すかが、今後のまちづくりだ」と言っています。その違いとは、

各地の歴史をどの切り口で切るかであり、それを変えれば違ったまちの姿が見えてきますから、意識的にそうしたまちづくりを進めればよいと考えています。

福岡・博多は、室町時代から戦国時代に通商で繁栄したまちですから、それを軸にまちづくりすればよく、江戸時代に軸を求めずともよいのです。先述の「社会に対する刺激」という観点からも、私は博多商人が活躍した時代を軸としてほしいと思います。唐人町など、外国人の存在あつての町名ですし、江戸時代よりもっと昔の福岡は、今以上にアジアに開けていたのです。

そのように開かれた都市として社会融和を図り、皆がもっと住みやすいと感じるようにすることが重要ではないでしょうか。「住む人が快適と思う社会を、住む人が参加して作る」ことがその基本になります。緻密で、ある意味徹底を好む日本人が、これが快適だと追求し、それをトップダウンではなく住民参加で作れば、世界中の誰にとっても快適なまちのはずです。家の前を少しでも綺麗にしようとするのと同様、皆が参加して良いまちづくりをしなければなりません。

住民のヨコの絆、相互補完関係を築こう

とはいえ、今の日本社会には住民同士のヨコの絆が不足しています。互いに協力し、助け助けられる関係をどう築くか、これは行政でどうこうするのは難しく、市民の自覚が必要です。

伝統、例えば祭りはその突破口になるかもしれませんが、祭りへ若い人や転入した人、外国人等を巻き込むのは簡単ではないでしょう。ただ、祭りに限らず、何か核になるもの、それも全員参加でなくとも2～3割が参加する核があれば良いと私は思います。福岡市内でモデル地区を決め、そこでそうした核となるもののあるまちづくりを継続し、他地区に伝播させ、結

果として市域の3割ぐらいでそうした動きが見られる程度に広がれば、相当なインパクトがあるでしょう。

これは一つのアイデアですが、退職後の老夫婦が、同じ地区やマンションにいる若い夫婦の子供を預かるシステムなどはどうでしょうか。もちろん、事件や事故に至らないよう、行政が一定程度関与してきちんと管理できる制度を作る必要はありますが、老夫婦は子供と接することで生きがいを感じますし、若い夫婦も勿論助かるでしょう。市民の相互補完のいい例だと思うのですが。

松下幸之助氏は「共存共栄」「自他共生」と仰っていますが、まさに自分と他人が相互に生かされているという、社会の根本的な部分をどう市民に理解してもらうかが知恵の出どころですね。東日本大震災を通して、家族や地域社会の大切さを多くの人が理解したというの、そうした理解を進める上では一助ですね。

伝統を「麴」とした心地よさと刺激の両立を

福岡市では約9割の市民が住み続けたいと思うと同時に、マナーの悪さや犯罪の多さを感じているようですが、これについて言えば、墨を磨る時に墨と水が馴染むようなこなれ方を、心地よい感じと刺激の両立が大切です。

刺激は物事を前に進めます。現代社会に生きる我々は、安定感・安住感を欲しますが、それだけでは社会の進歩はありません。皆が住みやすく快適な社会になるのは進歩ですが、それだけでは社会全体がダイナミックに前進する動きは止まります。それではダメですね。

しかし、マナーの悪さ、犯罪の多さはやはり問題です。こなれた感じとは正反対の、触れると痛いような社会問題であり、そういう問題のない、良い感触の社会にしていけるべきです。

こなれた社会の核になるもの。それは先程触れた「伝統」だと私は思います。穀物に麴を入

れることで味噌ができますが、こなれた社会を作るための麴は伝統ではないかと思うのです。

伝統は非常に制限の多い、人間を型にはめようとする面があり、それは戦前の日本社会と相当一体化していました。ですから、戦後日本は戦前社会を全否定し脱却しようと、アメリカ文化をどんどん吸収し、ほとんど伝統を顧みないことで、日本が生まれ変わり、日本人が幸せになると皆思ったわけです。それが、いつしか心や社会の空白に気付き、何かそれを埋めるものが必要だということで、もう一度伝統に回帰する風潮が出てきたのです。これを意識的に進め、同時に、良いものは残し悪いものは是正する取捨選択を行うべきではないでしょうか。

そう考えた時、共通の伝統に結びつけられたコミュニティが、麴の役割を果たして、社会を熟成させていくのではないかと思うのです。

市民参画の快適なまちがソフトパワーとなる

さて、中国の人々は今後も数多く福岡に来るでしょう。ただ、その関心は刻々と変化し、今やリピーターの関心は日本のライフスタイルにあります。ですから、お決まりの百貨店や電器店等へ案内せず、我々のライフスタイルを見せて感動してもらうべきです。東日本大震災における日本人の冷静さ、節度を持った対応を、中国は驚嘆・感嘆の目で見えており、単なる買い物や物見遊山ではなく、日本人の生活に接したがついています。

ということは、福岡に住む人が快適と感じるまちを作れば作るほど、それは中国人にとっても魅力的な都市になるのです。福岡に来て、食事をし、公園でくつろぐことが楽しい、という観光にシフトしていくでしょう。上海など先進的な高層建築が数多く作られていますが、ホッと空間がありません。そうした空間を福岡で見えて感じてもらえれば、彼らは感動を受けて帰り、口コミで広げてくれるはずです。

市民が参画し、市民が快適だと思ふまちづくりはソフトパワーになります。福岡が本気でそれをやれば、世界の先端をいきますし、その方式は、狭い面積の中で多くの人が快適に暮らせることになるので、世界的な普遍性も持つでしょう。そうした都市の快適さが、日本や福岡が世界に対し提供していく価値になると考えます。ただし、快適とは何かについては、あくまでも市民が決めることです。

ソウル、上海、ジャカルタ、東京・・・アジアの主要都市の中産階級が住む生活空間は、今ではほぼ同じで、近代化プロセスの中で、非常に共通性・類似性の強いコミュニティがアジア各地に出現しています。福岡がその中で成功すれば、他も真似して同様になっていくのではないのでしょうか。この伝播力に着目すべきです。また、若者の文化もインターネットやポップカルチャーを介してどんどん共通性を持ってきていることにも注目すべきでしょう。

要求型から提案型の市民社会への変革を

今後の市民社会は、要求型から提案型に変わるべきです。従来は市民の要求を受け、行政の責任で策を講じましたが、行政末端になればなるほど市民ニーズは広がり、すべきことは増大します。同時に、市民側のニーズも多様化します。つまり、集約しきれない多様な市民のニーズを、手薄な行政で対応するのは必然的に不可能なのです。そうなると、ニーズを持つ市民が、課題と共に解決方法、できれば財源まで考え、時に汗する市民社会になるべき、ということになります。また、マスコミも現状のように批判するだけでなく、どうすべきかを考え、提案すべきです。

霞が関の省庁も、課題と対応策を市民側から示されれば、それを理解し実行する力はあるのですが、一から考えるととなかなか時間がなく、市民から要求しても答えを出すのが困難、

というのが実態です。

そうした一方で、行政側も市長のリーダーシップの下、常に施策にプライオリティ付けをしないとけません。そのためには、まさにビジョンを持って進めていく必要があるのです。

新ビジョンは包括的・総合的なものに

今回の新ビジョンは、本当に包括的・総合的なものにしてほしいですね。例えば「環境都市」と言えば、従来は環境の切り口だけを考えるものでしたが、これからの都市づくりでは、環境以外の数多くの課題と複合的に整理・解決しなければ、快適になりません。人と環境と都市の調和がとれても、そこで医療が機能不全を起こすようでは、市民は幸せとは感じないでしょう。そうした意味で包括的・総合的であるべきだし、アジアのリーダー都市を目指すのであれば、その面でモデルとなる都市を目指すべきです。

もちろん「全て福岡で」とはいかないでしょうから、取り組み易いことを、モデル地区から始めれば良いのです。その際、最も重要なことは「いかに持続性を持たせるか」です。最初は行政による予算の重点配分があってもいいですが、それには限界があるのですから、補助金等に頼らずとも自己資金を作り出せ、回せるメカニズムを作らなければなりません。それは大変難しいことですが、持続性を考えた時には、産業化や収益を考えることによって、初めて“絵にかいた餅”ではない調和のとれた都市づくりができるのです。

規制を活用し、外資を経済発展に活かす

そうした産業化を考えると、やはり今後も一定の経済発展・経済成長は重要になりますね。あと5年程は中国の金余り現象が続くでしょうから、その力を上手に活用し、福岡の経済発展を図ることも考えるべきです。

外資が来るとパニックになるケースが見ら

れますが、安全保障などを踏まえ、我々が法令規則を作り、我々の国土や財産を守ればいいだけの話です。外資による水源の購入に疑問を呈する人もいますが、これも「客観的・科学的観点から水源環境を保全するため、次と次の要件を守る」といった条例を作れば良いのです。投資を断るのは大変勿体ない話で、我々が上手に管理し、その管理下で外資を使えばいいだけで、何も怖がることはないと思うのですが。

ただ、規制・緩和いずれにしても、大きく動く摩擦が生じるので少しずつすべきです。その上で、例えば土地の所有権は渡さず、利用権だけ渡したりリースしたりすれば、外国資金で開発は進むのです。さらにコンサルタントやマネジメントも日本式にすれば、中身はいよいよ日本的な開発となります。

そうしている内に、中国人も「日本でこうすると嫌われる」ということを学習します。今はそうしたことを知らないから中国国内と同じように振舞うだけで、別に日本へ悪意がある訳ではないのです。日本の流儀を理解すれば、摩擦も一層減るでしょう。

本格的な特区制度で、地域経済の発展を図る

福岡の経済は支店経済と言われて久しいですが、グローバル化が進む世界の中で、福岡経済、ひいては九州経済の位置付けをもう一度考え直す必要があるはずですが。私は「アジアとの一体化」が、その解を導き出すキーワードになると考えます。

これまでの福岡は、九州・山口各地から様々な資源を吸い上げることで元気を得てきましたが、これからは九州・山口トータルで発展しないと生き残れません。そうした大きな視点に立ち、様々な施策の立案や発展を図る必要があるでしょう。

例えば、福岡で意識している人は少ないでしょうが、農業の活性化は急務です。隣の中国・

韓国等に、高価でも安心して美味しい日本の農産品を求める人が数多くいるのですから、そこをターゲットにすれば農業は成り立つはずです。農業は雇用や国土利用にも大きく貢献することも忘れてはいけません。さらには、ものづくりをする中小企業をどう育成するのか、地場産業をどう盛り上げるのか、アジアを視野に入れて産業を考えることが早急に求められます。

そうした状況下では、本格的な特区の導入も有効です。日本は規制が多過ぎる上、事前審査までは非常に厳しいのに、審査後は無責任で、これでは投資は呼び込めません。まず、行政や役人の恣意性を排除すべく、ルールを詳細かつ明確に公開し、それを守る限り自由に参入可能にする。しかし、違反者には厳罰を課す。少なくとも市独自で行える事業では、こうした発想の転換を進めて活性化を進めてほしいですね。

心の豊かさや生きる意味を大事にする社会へ

日本社会は戦後ずっと物質的な価値を求め、そして日本の歴史上最高水準の経済状態に至りました。しかし、その社会で生きる我々の満足度となると、平均寿命が60歳前後、夏は猛暑、そして軍事政権下にあるミャンマー国民の満足度にも負けるでしょう。彼らが日本人よりも幸せだと感じている事実は、深く考えさせられることです。つまり、物質的な豊かさではなく、心の豊かさ、生かし生かされていることに感謝の気持ちを持つ社会に近づけていかないと、心の満足度は高まらないということです。

「私は100歳まで生きたい」という人がいますが、100歳になることが目的ではなく、生きて何をするかこそが、人間にとって大事なことでないでしょうか。私が思うには、生きることそのものには意味がなく、生きて何をするかに意味があります。自分が人生を楽しみ笑うことで子や孫や隣人が喜ぶ、喜ぶ姿を見て自分が生かされる。そうした何かをすることに、人間

の意味があるのではないのでしょうか。

今の日本社会は、ものの考え方のボタンをどこかでかけ違えているように感じてなりません。行政が様々な施策を講じて、市民の側に心の豊かさや、他者との共生といった価値観が広まらないと、その効果は浸透しにくいでしょう。もちろん、行政側にも問題は多く、それは批判してもいいのですが、市民の側も自己中心的な批判ではなく、皆のために批判するという心持ちであるべきはず。あれもこれも人のせい、という発想を抱く人を少数化させないと、そうした人が多い社会は、いくら頑張っても誰も幸せになれない不幸社会だと思うのです。

インタビュー日:2011/9/6 文責:URC 白浜